

はじめに

伊達植宗は十六世紀前半、南奥羽において名を高めた武将であり、奥羽における戦国時代の幕開けにふさわしい人物であったといえる。伊達氏といえば仙台藩を開設した政宗(独眼流と称されている)が有名である。だが本書で取り上げる植宗(政宗の曾祖父である)を知っている一般の方は少ない。戦国大名が制定した分国法の一覧表の中に、塵芥集を載せている歴史の教科書はあっても、制定者の植宗の名前は出てこない。また一般の方には「植」の読み方も難しく、「たねむね」と読むことにも骨が折れるかもしれない。伊達氏は室町將軍とは関係が深く、歴代の伊達氏の当主が時の將軍から一字拝領して名前を名乗るのが一般的であった。植宗も十代將軍義植の一字を得て、植宗と称したのである。

植宗は戦国大名としてはあまり知られていないが、しかし見方によっては政宗に匹敵する武将ということもできる。曾孫の政宗が奥羽の戦国の世を勝ち抜き、南奥羽地域をほぼその支配下に置いたのは、植宗が戦国大名としての基礎を築いたからであるともいえる。「父子相克」といった相続をめぐる争いが内部で続くのは伊達氏の「伝統的」な支配・相続の形態であったともいえるが、植宗も「天文の乱」という子供の晴宗

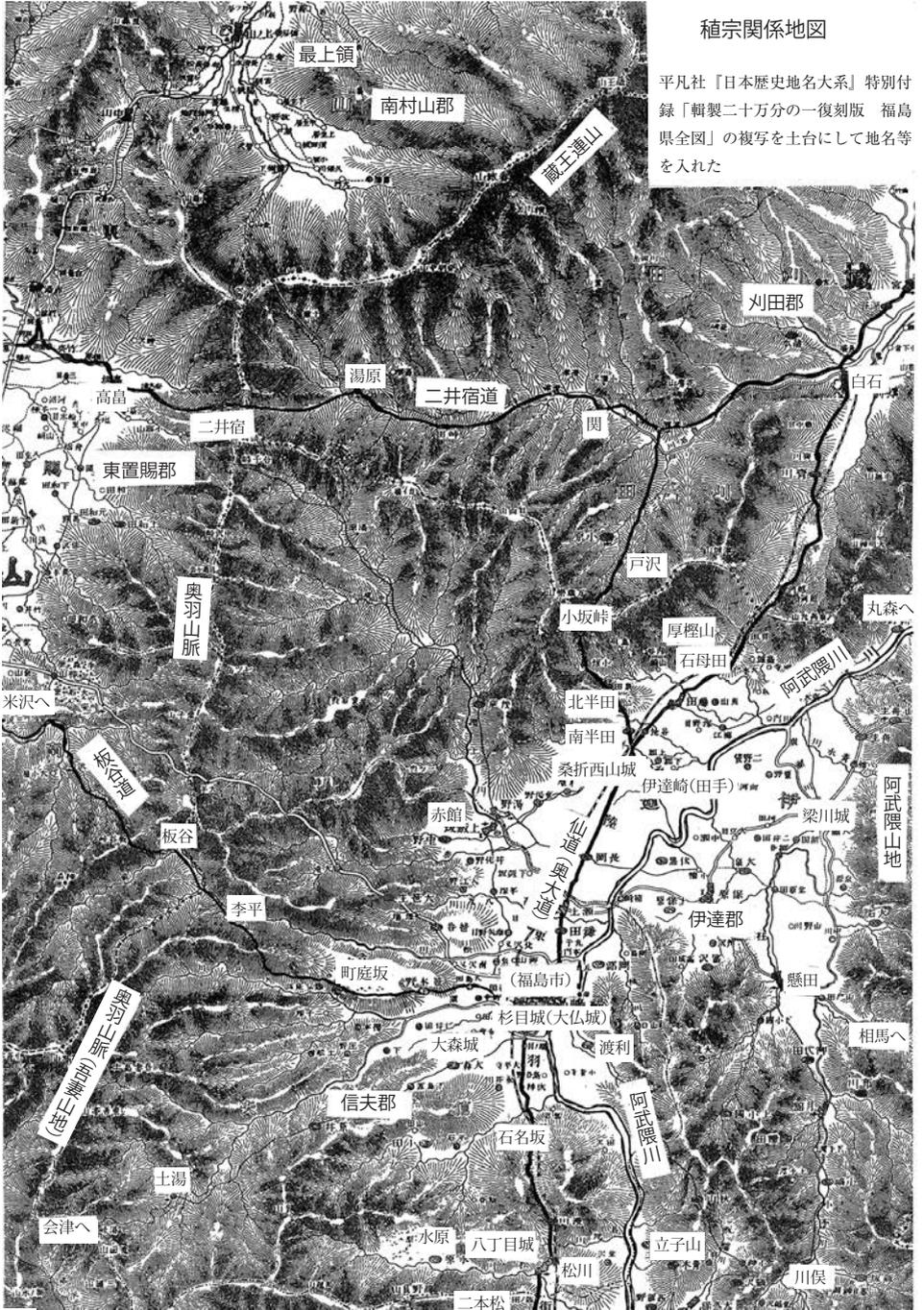
との争いで「敗北」して引退を余儀なくされてしまうのである。しかし、南奥羽における伊達氏の権勢は植宗時代に一つのピークを迎えていた。なお、ここでの南奥羽とは、陸奥国では葛西氏領・大崎氏領(現岩手県南部・宮城県北部)から以南の地域(現福島県全域まで)であり、出羽国においては最上氏領・武藤氏領(現山形県)から南の地域のことである。

伊達氏の領国は伊達・信夫郡(現福島県北部)、刈田・伊具・柴田・名取郡(現宮城県南部)、置賜地域(現山形県南部)等に三区分される。殊に福島・宮城県側と山形県側の間には奥羽山脈が連なっており、その山脈を越える交通路は二井宿街道(七ガ宿街道ともいう。陸奥国伊達郡桑折・刈田郡白石から出羽国東置賜郡高島までの街道。大部分の街道は刈田郡)の一本であった。そのため「父子相克」でも山脈を挟んで対立するなどということもあった。しかし植宗時代における本拠は伊達郡梁川、あるいは桑折西山城であり、植宗はこの地域を中心に活動したのである。引退して死去したのは伊具郡の丸森城である。永禄八年(一五六五)六月十九日のことであり、その二年後に政宗が米沢城で誕生している。

植宗が伊達氏の家督を相続した十六世紀初頭のころの南奥羽の状況は、北には斯波氏の系譜を引く奥州探題大崎氏(内紛により伊達氏に頼るようになっていた)、鎌倉時代に奥州総奉行であった名族葛西氏が領国支配を展開しており、出羽では大崎氏の一族で羽州探題とも呼ばれている最上氏等が所領を広げていた。南は十五世紀に奥羽でもっとも有力な国人であった白川氏(このころ内紛により力は減退しつつあった)、古代以来の氏族である岩城氏、奥州合戦後に下向した相馬氏、会津をおさえる蘆名氏、奥州管領の系譜を持つ二本松氏

種宗関係地図

平凡社『日本歴史地名大系』特別付録「輯製二十万分の一復刻版 福島県全図」の複写を土台にして地名等を入れた



等が抗争・連携を重ね、消長を繰り返して戦国大名としての覇権を確立しようとしていたのであり、国人一揆に関わってきた中小国人層も侮れない存在であった。また隣国の越後国とは物資の流通や上洛等をめぐって深い関係にあり、伊達氏は越後国守護上杉氏とも密接な関わりがあった。また揚北(阿賀野川以北)の国人等も無視できない存在であった。

このように有力領主が鎬を削っている中で、植宗は南奥の最有力の大名となっていくのである。彼がそのためにとった行動は、まず当然のことであるが、大名権力の確立のために領国内の内政を整備することであった。たとえば、段銭・棟別銭帳を作成して財政を強靱なものにし、さらに主従制を確立するうえで必要な所領安堵(買地安堵)を行い、軍役を強化した。塵芥集といった分国法の制定も内政の整備に主眼があった。また他大名を圧倒するような観念的権威を確立しようとした。植宗は左京大夫の官職を得、陸奥国守護に補任されることよってそれを実現している。そしてもつとも特徴的な施策として、近隣諸氏との間の婚姻政策をあげることができる。植宗は二人もの子女に恵まれているが、その子供らを近隣の大名や国人に半ば強制的に養子として押しつけたり、嫁がせたりもした。そして近隣大名・国人らと連携したり、ときには乗っ取ったりしようとした。

以上のようなことを次々に実行した植宗は、奥羽に強い影響力を發揮するようになり、彼に反抗する領主層はほとんどいなくなったのである。このようなことから、植宗は自らを「奥州王」的な存在と意識するようになったと思われる。この意識は曾孫の政宗に強くみられる意識である。しかし植宗の絶頂は長くはなか

った。子の晴宗が反旗をひるがえして「天文の乱」を引き起こしたことにより、奥羽統括の「王」となる夢は挫折して失意の底に落ちていくのである。

伊達植宗をテーマとする本書は次のような構成と内容で、主として植宗の活動を通じて彼の人物像を描こうとしたものである。だが彼を描くための前提として、彼が生きた時代相をはじめ、統括した領域の特徴・様態、有力家臣・弱小領主層の動向、在家などが中心となつている家臣の所領の中で、その在地支配の実態と人々の動向をみる必要がある。そのために植宗が苦闘して作成した法律である塵芥集の内容の検討、段・銭・年貢等の徴収のあり方などを鑑みて、その領国に生きた人々について検討している。このような問題意識から十六世紀前半の南奥羽地域の動きをも素描している。

序章の「植宗以前の伊達氏」では、伊達氏が陸奥国に下向してきた奥州合戦から植宗の生誕までの歴史、すなわち鎌倉・南北朝・室町時代の伊達氏の行動を概説している。

第1章「伊達植宗の登場―陸奥国守護への道―」は、生誕からその後の植宗について、主として室町幕府との関係、すなわち一字拝領・任官、陸奥国守護への補任等について概観し、これらの観念的権威に関わる問題等の経緯を論じている。

第2章は「伊達氏領国の様態―所領の特質と支配―」と題し、領国内各地の景観とその特徴、所領や城館等の特質について具体的に考えている。

第3章「領国内の人々」は、細分化した所領への対応、在家・百姓、下人や非農業民の活動と特質につい

て触れている。

第4章「戦国大名へ」は、陸奥国側と出羽国側に分れている領国を、いかに統一的に統治するかという課題を考えるため、領国内のトラブル等について論じ、また貨幣経済の発展により銭が大量に必要となった結果、それへの対応として棟別銭・段銭に関わる帳簿の作成等にいたった事情を検討している。

第5章「塵芥集をめぐって」は、分国法である塵芥集の特徴を探り、その法の持つ意味・意義について考えている。この法の中で、領国内に生きた人々の様態をさらに深く検討している。

第6章「植宗の対外政策」は近隣大名や国人との抗争・連携、養子縁組について論じている。植宗の目指していたものは、一介の国人であった伊達氏が奥州探題等の権威ある家を凌駕して「奥州王」となつてゆくことにあつたと考え、そのために用いられたのが自らの子弟を活用することであつたと想定した。この点についての個別の合戦とともに、養子縁組による勢力拡大について具体的に論旨を展開している。

第7章「天文の乱」は、乱の勃発の理由・経緯について、植宗が時宗丸を上杉氏に養子縁組させようとしたことに対する晴宗の不信感があつたのではないかとし、さらに乱の終結を近隣領主層が晴宗支持にまわつたことに要因を求め、なぜ晴宗を選んだのかを論じている。

終章で「奥州王と植宗」と題して論じたのは、植宗が目指していたもの、政治的に得ようとしていたものは何かという点について考えたもので、曾孫政宗の「目論みや思い」と比較しながら検討した。やはり両者ともに「奥州王」意識を強く持っていたのであり、十五世紀ごろに作られてきた伊達家の神話(平泉藤原氏の